

エンカウンター (ENCOUNTER)

第232号

2021年8月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第1の手紙講解説教」より (2)

あいさつ

神のみ旨により召されてキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから、コリントにある神の教会、すなわち、私たちの主イエス・キリストの御名を至るところで呼び求めているすべての人々と共に、キリスト・イエスによってきよめられ、聖徒として召された方々へ。(コリントI 1・1-2)

発信者は、パウロとソステネです。パウロは神の御旨により召されてキリスト・イエスの大使徒となった者で、イエスの代理者として、イエスの権限をもって、これからの手紙を書くとともにあります。ソステネは、パウロの同信の兄弟です。彼はパウロに兄弟と呼ばれ、まことに光栄な人です。私共信者は、イエスの弟と呼ばれている。その光栄は計り知れません。受信者は、コリントにある神の教会。……その教会にある人々は、イエス・キリストによって清められ、聖徒(この世で選ばれた者)として召された人々であります。これらの人々、至る所で、主の御名を呼び求めている者が一つの大きな教会を組織していました。当時は、まだ一般には、クリスチャンと呼ばれてはおりませんでした。主の御名を呼び求めている者、即ち、イエスを主と告白する者あるいは、聖徒、即

ち聖なる者ではないが、現在は信仰によって神に選ばれ、将来は主の日に復活して、聖なる者となる者を意味しています。

主イエス・キリストの御名を呼び求めているすべての人々

「主イエス・キリストの御名を至るところで呼び求めているすべての人々。」これが信者の代名詞として出ております。当時はキリスト信者という言葉はありませんでした。「イエス・キリストの名を呼ぶ者」あるいは「聖徒」と呼ばれていました。十年前には、私の歌は次のようなものでした。

主イエスと呼びて励まん 今日もまた 手にくる業を 御国めあてに
これが10年後には、次のように変わってきました。

主イエスと呼ぶを励まん 今日もまた 手に来るわざも御名を呼びつつ
このように、私の歌の「てにおは」も変わり、文句も変わりました。始めは信仰の第1段階として、次のようなものでした。

主イエスにならい励まん 今日もまた 手に来る業を 御国めあてに
しかし今回の歌は、私の最終的な歌となりました。最初は信仰、次は贖い、そして、最後に、主の御名を呼ぶことに収斂し、私のすべてになってきました。

主イエス・キリスト

キリストが十字架にかかり、復活して、私のために、「キリストが」なにをなしたか。現在、「キリストが」私のために、何をなしているのか。それから、未来、「キリストが」私を迎えて、復活せしめて下さって、何をしてくさるか。これを信じる。これをキリスト信者と言います。自分がよいことをしているわけではありません。神の恵みに引っ張り込まれている者をクリスチャンと言います。歳月が経てば経つほど、キリストが私のためになして下さる、最後になったら、その恵みがすべてになって来ます。クリスチャンとはキリストに属する者、キリストの一部分という意味であります。パウロは、9節までに、イエス・キリストと言わずに、主イエス・キリストと5回も言っています。10節の始めにもこの言葉が出てきます。「主」とは「救い主」の意味であります。この部分を読むと、パウロは「主イエスよ」といくら言っても言いすぎることはないというような感じをうけます。諸君、虚心坦懐にここを読んでみたまえ。

3 節、恵と平安について

わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵と平安とが、あなた方にあるように。(1・3)

御恵みとは、神がキリストを降して、十字架上で我々のすべての罪を贖って、処分して下さい、我々に永遠の命を与えて下さったことでもあります。その永遠の生命を受けて、我々は神の子とされたのであります。キリスト教ではこれを「救い」と言います。信じなくてもよい。キリスト教の「救い」、「救われた」というものはどういうものであるかだけでも知って置いて欲しいと思います。この恵みは、この世のもので動くものではありません。「平安」はこれから来ます。我々は死して天国に行って、復活させてもらう。そして神と共に永遠に生きるのであるという、この確信が与えられた時に始めて味わうことのできる「平安」であります。この世でうまくいっている平安とは違います。神の恵みからくるこの「平安」は、この世のものによって邪魔されません。どんなに心が動いていても、乱れていても、神はこの恵みを下さいます。それは動きません。贖いから来ているから動かない。

我々の理解しているキリスト教との違いについて

我々の理解では、大体我々の知っている愛の行為を行うことぐらいをキリスト教と思っています。多くの教会では、愛の行ないをせよ、神が我々を愛してくれた如く、他人を愛せよと、教団も主張しているところであろうと私は想像します。しかし、「愛せよ」ということは、なにもキリスト教だけではありません。「親切にせよ」は、どの宗教でも勧めています。しかし、キリスト教では、その前に、「この故に」という字が付いています。即ち、御恵を受けて、罪許されて、復活の望みを受けているが故に、ということが前提となっています。その故に、汝らに勧める、良い行ないをせよ、とあります。「我が主」とは、十字架上で死に、昇天し、復活した主に留まらず、再臨して我々を復活させて下さる方のことを言います。我々は復活して、主キリストと同じ体を頂いて、永遠無限に神の国に生きるという、この大いなる希望について遺憾ながら、我々にはあまり興味がない。我々は地上のものが欲しい、私も永遠の命は欲しくありません。しかしながら、聖書は、「救い」としてこのことを提供しています。我々は現在それを欲しくありませんが、それを聖霊によって、それが我々の生活の中心となる時に、この世において恐るべきものが無くなります。そして、それは我々の努力にはよりません。恵みによります。

分争問題に対する解決の方法

いよいよこれから手紙の本文に入ります。第1に、コリントの抱える問題について、コリントから質問状を持って来ました。手紙を持ってきたクロエという人が、コリントにおいて、分裂があって分争していることを告げた。そのことを聞きまして、パウロが非常に心配しまして、コリント人の質問に答える前に、分争の問題について注意を与えました。それが1章の10節—4章の21節、始めの4章、手紙の大体3分の1は分争問題に対する解決の方法を教えています。4つの点について教えました。

本日はそのうちの一つ、君たちの分争の根源は、イエス・キリストを仰がずして人間を仰いでいます。人間崇拝に陥っています。それがその原因であるということについて訓戒を与えている場所であります。信仰の奥義を引っ提げてその問題の解決を迫っています。コリント前書は、そうした実際問題に対する解決方法を示した手紙でありまして、しかもキリスト教の根本原理によって解決を示しました。…

20世紀に入りまして、エキュメニカル運動、即ち全教会が一つになるという運動が、実に20世紀において具体的に進みつつあります。この言葉は、エキュメニカル問題に対する最も有力なる解決方法と言ってよろしい。

私はパウロにつく

わたしの兄弟たちよ。実は、クロエの家の者たちから、あなた方の間に争いがあると聞かされている。はっきり言うと、あなたがたがそれぞれ、「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」「わたしはキリストに」と言い合っていることである。(コリント I 1・11,12)

君達の中に、私はパウロにつく、私はアポロにつく、私はケパにつく、私はキリストにつくというふうに、分争があると聞く。またその分争の原因は、根本であるイエス・キリストを離れて人間崇拝に陥っているためである、と戒めました。4つの派、パウロ、アポロ、ケパ、イエス・キリストと書いてありますが、パウロ党はパウロを中心に仰ぎ、ペテロ党はペテロを主として仰いだ。ペテロはローマを訪問したと信じられる節がありますから、ペテロもローマへ行く途中にコリントへ寄ったのであろうと学者は想像しています。アポロは、パウロが第2回伝道旅行でコリントから去った後にコリントに来て伝道しましたから、アポロを中心に行っている連中がいました。キリスト党というのは、学者の間に非常に議論のあるところであります。…

13節において、パウロはその人間崇拝を打ち破るために、「キリストは4つにも、5つにも分かれたるものであるか。あなたのために十字架についたのはキリストである。それから、バプテスマはパウロの名によって、パウロと一緒にいるために受けたのか。バプテスマは、自分に死んで、イエス・キリストと一緒にいる、イエス・キリストの名において、イエス・キリストと共に生きる儀式ではないか。」と書いてあります。

キリストの十字架

いったい、キリストがわたしをつかわされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を宣べ伝えるためであり、しかも知恵の言葉を用いずに宣べ伝えるためであった。それは、キリストの十字架が無力なものになってしまわないためなのである。
(コリントI 1・17)

この十字架の問題は、パウロの信仰の中心でありまして、人間の道徳、哲学、その他人間の知恵の言葉は、十字架の救いをぼんやりさせる、鈍らすということがある。むしろ、そういう人間の哲学の言葉を用いない方が十字架の救いがはっきりする。往々にして、人間の知恵の言葉は信仰を解せずして、その言葉をふりまわしますから、大体イエス・キリストの十字架を隠して、自分の道徳、哲学を振り回すことになります。私は、人間の知恵も言葉も使いようによっては、十字架の意義をより鮮明にするために必要となるであらうとは思いますが、ここでは、パウロは、人間の知恵のマイナスな点を力説していますが、私はプラスのも面があると思う。パウロ自身はその証拠です。パウロ自身は、彼のもてる哲学によって、それを助けとして、十字架の贖いを説明しました。それがロマ書になって現れています。

パウロとアポロ

私は、パウロの偉大さを思います。自分の贖いに反対する人とは別れなくてはなりませんが、反対しない人、アポロのように、自分の福音を理解しない人に対しても、パウロは十分に手をつないで、福音を述べた。私は福音とはそういうものだと思います。本当に分かっておれば分からない人と分裂するわけがない。自分に高い理解があれば、低い理解に対して同情こそすれ、反対になるわけは有りません。お互いに分争があり、反対があり、争いがあるとすればすれば、ふたりとも福音が分かっていない証拠であると思います。パウロはよく福音の分かったひと、アポロはまだよく分からない人。この二人が完全に手をつないで伝道した。パウロは植え、アポロは水注ぐとパウロは言いました。完全にこの二人の友情は、伝道者の友好として、すっかり一致していて、仲が良かったのであります。

内村鑑三と宮部金吾

私は、その最も身近な良い例として、内村先生と宮部金吾先生の関係に見ます。宮部金吾先生は、内村先生の十字架の贖いの信仰については十分ご理解されていなかった。しかし、内村先生の信仰に対して、宮部先生は反対なさらなかった。それで宮部先生と内村先生は、実に仲が良かった。内村先生が、畢生をかけて研究された「ロマ書の研究」、これは将来残る本と思いますが、その巻頭に「同級同窓の友なる宮部金吾君に旧友の変わらざる愛をもってこの書を献ず」と書いてあります。クラシックなこのロマ書も研究を親や兄弟に献本せずに、自分の同窓である宮部金吾君、しかも十字架の福音の理解については、十分に理解のなかった友人、北海道大学教授理学博士、ドクトル宮部金吾君に、旧友の変わらざる愛をもってこの書を献じています。

パウロの使命、君たちの使命

パウロの使命は、バプテスマを施すことではなくて、福音を宣べ伝えることであったという点に、私は非常に感銘を受けました。人には使命があります。パウロの使命は、福音を宣べ伝えることであった。洗礼を施すことは、信仰を告白して、信仰を人に示すことですから、伝道師にとっては非常に大事なことです。しかしパウロは福音を宣伝するという使命に専念したというところを学びたいと思う。私の使命は、パウロにならって、この場所で、福音を宣べ伝えるという事です。その他のことは、私にとっては副になる。これは、伝道師パウロの事であるけれど、諸君にも当てはまります。諸君にも現在の使命がある。学生は勉強すること。主婦は家庭を守ることが使命です。その第1使命を完全に尽くすことが人間として本当に必要なことであります。自分の使命を果たしたらよい。私は福音を伝道したらよい。私の使命は、聖日にここで福音を宣べするという事です。他の会合に出るということとは私の使命ではない。…諸君、先ず、人生における君らの第1の義務をやりたまえ。偉い人になるとか、偉い教養の高い人になるとか、そんなものは第2です。第1にやるべきことをやってから他のことをやり給え。パウロはそういうことを言っています。…パウロは、私は福音を宣べ伝えると言っています。私は、これは万事に当てはまると思います。

夫婦そろって信仰を与えられること

信仰を与えられて、自分と信仰の違う人に対して、その人の欠点を担うようになりたいと思います。そういう理想の信者になりたい。そういう信仰を与えられた夫婦、家族は幸福です。世の中において最も幸福なことは、夫婦揃って信仰を与えられるということです。これに優った幸福はありません。夫婦揃って、本当に信仰が分からされること、これに勝る人類の幸福はないと思います。夫婦のうち先に分からされた方が、自分の信仰による愛を相手に施してゆけば、きっと相手も必ず信仰を与えられます。使徒行伝には、「汝イエス・キリストを信ぜよ、しからば汝の家族も救われる」と書いてある。

.....

信仰の家族の麗しさは、紀元前第1世紀において、アクラ、プリスカのあの天幕職工の家を想像して見て下さい。コリントにおいて、パウロがお世話になった家族です。その家族の夫婦生活のうるわしかったこと。この夫婦生活がうるわしいということは、夫婦の能力や知識を超えて尊いと思います。少し、言語が読めるとか、そんなことよりも、親を尊敬し、親は子供を愛し、夫婦相愛し、兄弟睦まじく生活する方が、どんなに大事なことか。そのことが、人生の幸福にどんなに貢献するか分かりません。人生の幸福をエレベートする（高める）のは、学識にあらず、このような信仰による家庭生活であります。